

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## On the Utterance-initial wa of Responses to Interrogatives: The Transition from Topic Marker to Discourse Marker

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 有田, 節子, ARITA, Setsuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000459">https://doi.org/10.15084/00000459</a>

## 日本語疑問文の応答の冒頭に現れる「は」について

——係助詞から感動詞へ——

有田節子

立命館大学／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

本稿は、会話において係助詞の「は」が単独で出現する現象（「裸のハ」）を扱う。裸のハは他の裸の助詞類と同様、先行談話に依存することにより表現を完結させる現象と捉えられる一方で、裸のハ固有のさまざまな特徴が見られる。疑問文の応答の冒頭に偏在するというのもその一つである。裸のハの分布上の特徴を係助詞ハと疑問文の意味から導出し、さらに、裸のハが係助詞から感動詞への変化の途上にあることを示す\*。

キーワード：裸のハ、発話冒頭、助詞残留、感動詞、談話標識

### 1. はじめに

日本語の助詞は付属語あるいは拘束形態素とみなされているが、話し言葉では助詞が単独で句を構成する現象があることが指摘されている。よく知られているように、日本語の「名詞＋助詞」句は文脈から復元可能であれば句全体が省略、言い換えれば、「ゼロ代名詞化」される。助詞句全体が省略可能にもかかわらず助詞が単独で残ること（「反ゼロ代名詞化（Anti-zero pronominalization, Den & Nakagawa 2013）」）がなぜ起こり、それがどのような機能を果たしているかについて考察する。

本稿では、いわゆる係助詞「は」<sup>1</sup>が単独で発話の冒頭に現れる現象（以後「裸のハ」（有田2009）と称する）を考察の中心とする。そこには二つの問題がある。まず、格助詞の単独用法とは異なり、裸のハが疑問文の応答の冒頭に偏るという点である。疑問文の応答という環境とハの統語的・意味的機能との関係が明らかにされなければならない。つぎに、同じく格助詞の単独用法とは異なり、裸のハがいわゆる「感動詞」と似た機能を担うという点である。なぜ、格助詞ではなくハにおいて「感動詞化」が起こるのか、ハの感動詞としての機能とは具体的にどのようなものか、ハの提題形式としての機能との連続性はあるのか、という点が説明される必要がある。

次節では本稿が取り上げる裸のハという現象が他の助詞の単独用法と共通する点、相違する点

\* 本稿の一部は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」（プロジェクトリーダー：金水敏）の研究成果である。科学研究費補助金基盤研究（C）「発話冒頭に出現する助詞に関する研究：話し言葉特有の現象の解明を目指して」（20520365 代表者：有田節子）の助成を受けている。また、NHK アーカイブズ学術利用トライアルⅡ 関西トライアル研究Ⅱ「発話の冒頭に現れる提題助詞に関する実証的研究—日本人の新しいコミュニケーションスタイルの解明に向けて—」（研究者：有田節子）で採択された研究の一部である。

<sup>1</sup> いわゆる提題を表す「～は」という形式に対する名称はさまざまあるが、本稿ではそのような品詞をめぐる議論には立ち入らず、係助詞という名称を用いる。

について論じ、その問題を A, B の二つに分け、明確化する。3 節では、裸のハが係助詞のハに由来することを明らかにするとともに、係助詞のハにない裸のハ特有の性質を取り上げる。4 節では、2 節で設定した A, B 二つの問題について論じる。特に、係助詞ハの意味と疑問文の意味から裸のハの特性を導き出す。5 節では、裸のハが係助詞から感動詞への変化の途上にあることを論じ、6 節で議論全体をまとめる。

## 2. 問題

本稿は係助詞の「は」が名詞句を伴わず単独で文頭に出現する現象を扱う。

(1) 島田紳助： ポジションどこ？

野球少年： Wa:<sup>2</sup> ショートですね。 (TV1)

(1)' 野球少年：  $\phi^3$  ショートですね。

この現象が最初に研究文献に取り上げられたのは、Sato (2012) によれば、おそらく服部 (1949) において、「ごく稀ではあるが、このような附属語に該当する発音で始まる発話の現れることがある。(中略)『A 君は?』といったところで、彼は『はね、』 (= “Wa ne,”) と返して、しばらく音声のときれをおいて言葉を続けた。このワはホン ワ、ハコ ワ などのワと同じ附属語である。電話による会話で、『が行ったの?』という発話を観察したことがある。」(服部 1949/1960: 452) のような記述がある。吉田 (2004) によって本格的に取り上げられるまで半世紀以上経過していることからすると、最近まで服部の言うように「ごく稀」な現象だったことが推察される。

「は」が名詞句を伴わずに出現するということは、本来拘束形態素であったものが自由形態素のように振る舞うことを意味する。これに類する現象は話し言葉の日本語において広く見られ、裸のハもそのような現象の一つとして捉えられる面がある。しかし一方で、裸のハの振る舞いには、後で述べるようにそれが由来する係助詞のハが本来的に持つ情報構造上の機能が絡み、複雑な様相を呈している。

この現象の特異な点は、ハ名詞句全体を省略することができるにもかかわらず、本来単独で出現できないはずの助詞だけが残存するというところである。言うまでもないことだが、話し言葉でも書き言葉でも日本語のハ名詞句は文脈において復元可能であれば省略される。

(2)  $\phi$  サザエでございまーす。

(3) そこで南<sub>i</sub>はある日監督の梶誠、キャプテンの星出順、マネージャーの北条綾乃を呼び集め臨時会議を開いた。そこで $\phi$ 練習方法の変革を提案した。(岩崎夏海『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』)

<sup>2</sup> 裸のハと通常の係助詞の「は」を区別するために、ローマ字表記とする。他の裸の助詞類も通常用法と区別し、ローマ字表記とする。「:」で母音が長めに伸ばされることを示す。

<sup>3</sup> 特に裸のハの前に何らかの要素が省略されていることを示す必要がある場合には、便宜的に「 $\phi$ 」という記号を使用する。

(2) は、発話の場面で復元可能である発話者を指す「わたしは」が省略されていると考えられる。  
 (3) の第2文には文脈から復元可能である先行する文の主題句「南は」が省略されていると考えられる（以後、「i, j, ...」という記号を使って示す）。

加えて、話し言葉ではハのみが省略されることがあることもよく知られた現象である。

(4) わたくし、サザエでございまーす。

単独で、つまり裸の形で現れるのはハだけではなく、格助詞 ((5)) や副助詞 ((6)) にも同様の現象が見られる。言うまでもなく、これらもハ同様、文脈で復元可能であれば格助詞句、副助詞句全体が省略可能である ((7), (8))。

(5) 01 M: (そ) やから: あの: う: もし

02 六時半やったやんな:

03 H: うん

→ 04 M: Ni: たどりついてなかったら: (林 2005: 9)

(6) タモリ: 食べながら練習するの?

→ 金子賢: Mo あります, はい。ササミ食べながらとか (TV2)

(7) A: 昨日, 6時半に<sub>i</sub> 駅に着いてた?

B: うん,  $\phi$  着いてたよ。

(8) A: ササミも<sub>i</sub> 食べるの?

B:  $\phi$  食べますよ。

(1), (5), (6) のような現象は、「前後の発話とともに、一つの表現形式的に完結したまとまりを作り出すような発話」(西阪 2008: 86) と分析されることがあるが、不完全な形(裸の助詞)をとることで結束性(cohesion)を維持しようとしていると言い換えることができる。したがって、まず問われるべきことは、日本語では、(2), (3), (7), (8) のように、助詞句全体がゼロ形式であっても結束性が維持できるにもかかわらず、そして、その方が規範的であるにもかかわらず、なぜ裸の助詞という、非ゼロ形式化という手段が選ばれるのかという点である。(問題 A)

裸のハは、原則として文頭、しかも、(1) や (6) のような疑問文の応答の冒頭に偏って分布することが先行研究で指摘されている(有田 2005, Watanabe 2008, 那須 2011 など)。

(5) のような環境に現れる格助詞について、林(2005)は、(5)の1行目から4行目への流れを「メイン・アクティビティー」、間に挟まれている2行目と3行目を「サイド・アクティビティー」とし、4行目の裸の格助詞「に」を「サイド・アクティビティーからメイン・アクティビティーへの復帰を示す手続き」と分析している。

しかしながら、裸のハが偏って分布する(1)のような疑問文の応答の冒頭という環境は、林の言う「サイド・アクティビティーからメイン・アクティビティーへの復帰を示す手続き」とは捉えられない。したがって、二番目に問われるべきことは、裸のハがなぜ疑問文の応答の冒頭に偏在するのか、その位置でどのような働きをしているのかということであり、ハの機能と疑問文

の応答という環境からその点を説明する必要がある。(問題 B)

### 3. 現象

#### 3.1 裸のハは係助詞のハ

問題 A, B について議論する前に、裸のハ句に想定される省略要素を詳細に観察した有田 (2009, 2011, 2012) の議論の概略を示し、裸のハが係助詞のハに由来することを示しておく。

次の (9) ~ (13) は、いずれも、日常の会話の中で聞くことのできる裸のハの例<sup>4</sup>だが、これらの裸のハの前に省略されていると推定されるのは、それぞれ、(9)' ~ (13)' である。(9B) の裸のハの前には、(9A) の主題名詞句 (NP と標示する) である「こしあん」が (9)' のように省略されていると考えられる。同様に、(10B) には (10A) の格助詞句 (PP と標示する) が省略されていると考えられる。

- (9) A: こしあんは売り切れ?  
B: Wa: 売り切れました。
- (9)' B: [NP こしあん] Wa: 売り切れました。
- (10) A: ○○さんから連絡はないですかね。  
B: Wa: 連絡ないですね。
- (10)' B: [PP ○○さんから] Wa: 連絡ないですね。

裸のハの省略要素は先行する発話の名詞句や格助詞句ばかりとは限らない。(11B) の裸のハの前には、その意味するところから、「菓子パン」というよりも「菓子パンを朝から食べるの」という節 (CP と標示する) が省略されていると捉えたほうがよいだろう。同様に、(12B) の場合は、(12A) の「書道」ではなく「書道をしているの」であり、(13B) の Wa: の前に省略されているのは「明日の飲み会をどうするか」だと考えるのが妥当であろう。

- (11) A: 菓子パンって朝から食べれる?  
B: Wa: ちょっとつらいな。
- (11)' B: [CP 菓子パンを朝から食べるの] Wa: ちょっとつらいな。
- (12) A: 何年ぐらい書道してるんですか?  
B: Wa: 10 年以上ですね。
- (12)' B: [CP 書道をしているの] Wa: 10 年以上ですね。
- (13) A: 明日の飲み会どうするん?  
B: Wa: まだ考えてない。
- (13)' B: [CP 明日の飲み会をどうするか] Wa: まだ考えてない。

このように、裸のハの前に省略されているのは、名詞句、格助詞句、名詞節、そして間接疑問

<sup>4</sup> 大阪樟蔭女子大学の国文学科の学生が日常的に聞いた例である。

節の場合があり、係助詞のハに前置しうる要素と一致する。

さらに、裸のハの解釈は、係助詞のハの場合と同様、いわゆる主題と対比の両方がある。たとえば (9B) の裸のハは主題の解釈だが、(9B) は対比の解釈になる。

(9) A: こしあんは売り切れ?

B: Wa: 売り切れましたが、つぶあんは残っています。

裸のハの前に省略されていると推定される要素が係助詞のハの前置要素と共通し、また、係助詞のハ同様、その解釈に主題と対比の両方があることから、裸のハが係助詞のハに由来すると考えて問題はないだろう。

### 3.2 裸のハに特有の性質

裸のハは係助詞に由来するが、係助詞のハにはない裸のハ特有の性質がある。

第一に、原則として裸のハはターン交替の境界位置であるターンの冒頭に出現する (有田 2005, 2009)。通常の主題を表す係助詞のハは、文 (発話) の周辺位置に現れるが、文頭 (発話頭) とは限らない。

(14) {たぶん/明日} 鈴木君は大学にくるだろう。

裸のハは、ごく一部の例外はあるが、基本的には文頭、そして多くの場合、発話順番 (ターン) の冒頭<sup>5</sup> に出現する。裸のハが発話の途中に出現している (15)', (15)'' は不適格な文であり、\*で示す。

(15) A: 鈴木くんは、今日研究室にいると思う?

B: Wa: たぶんいるんじゃないかな。

(15)' B: \*たぶん, wa: いるんじゃないかな。

(15)'' B: \*さあ, 今日は見なかったなあ。Wa: いないんじゃないかなあ。

第二に、係助詞は文中に2回以上出現することが可能だが、裸のハの出現は1発話中、1回に限られる (吉田 2004, Sato 2012)。

(16) 鈴木先生は高橋君はどこにも推薦しないつもりらしいよ。

(17) A: 鈴木先生<sub>i</sub>は高橋君<sub>j</sub>をどこに推薦するつもりなの?

B: \* $\phi_i$ Wa ね,  $\phi_j$ wa MIT に推薦するつもりみたいだね。

(17)' B: # $\phi_j$ Wa ね, MIT に推薦するみたいだね。

(17)'' B:  $\phi_i$ Wa ね, 高橋君は MIT に推薦するみたいだね。

<sup>5</sup> 同一ターン内での自問自答の場合に自答の応答に出現することがある。

A: 邦正さんってどう。B: 邦正さんってだれ。あー, wa: 無理。

(17B)のような裸のハが2回現れる発話は不適格<sup>6</sup>である。裸のハが1回しか現れていない(17B)'の場合も、先行発話において裸のハの先行要素の候補が複数あるので、裸のハが何に言及しているのか曖昧になる(#で示す)。(17B)"のように曖昧性を除去することにより、裸のハが先行発話の「鈴木先生」に言及していることが明確になる。

第三に、係助詞のハは引用節の中に現れることが可能だが、裸のハは引用節内に現れることはできない(吉田 2004, Sato 2012)。

(18) A: ジョンはその時太郎を誰が殺したと思ったの?

B: \*ジョンはその時[wa: メアリーが殺したと]思ったよ。

(18)' B: ジョンはその時[太郎はメアリーが殺したと]思ったよ。

(18B)'において引用のト節内に「太郎は」が現れても問題ないが、それが裸のハの形をとると、(18B)のように不適格となる。これは裸のハが主節現象であることを示している。

第四に、冒頭にも述べたように、係助詞のハが主題句を構成する場合、ハだけが省略されてもハ句全体が省略されても全く問題はない。もし、裸のハが主題のハの「残留現象」であれば、裸のハを削除してもその文は成り立つはずである。しかし、実際には削除すると不自然になる例が一定数ある。

(19) 01 タモリ: おっ岸谷くんから来てますよ。

02 塚本: ああー嬉しいですねー。

03 タモリ: 久保田利伸くんとかですねー。

→ 04 塚本: Wa: 何か主題歌をあのドラマでやってもらってですね。 (TV2)

(19)' 塚本: # 何か主題歌をあのドラマでやってもらってですね。

たとえば(19)の4行目の塚本発話の裸のハは、削除して(19)'のようにすると、単独の発話としては文法的なのだが、この発話文脈では不自然になる。一方、本稿の冒頭の(1)の裸のハは削除して(1)'のようにしても不自然ではない。つまり、裸のハが義務的な談話文脈があると言える。

以上の四つの理由から、裸のハは係助詞のハを由来とするものの、裸のハとハ主題句の省略現象とは区別しなければならないことがわかる。

<sup>6</sup> 査読者から答えを探しながら Wa, wa, wa,... と繰り返すことはあるのではないかという指摘があったが、それについては以下のような実例があり、省略要素が同一である裸のハは繰り返される。

タモリ: 徹底的にやった?

小栗: はい。あの、ただこうお尻から

タモリ: あれやった?

小栗: カメラ

タモリ: 内視鏡

観客: (笑)

→ 小栗: Wa: wa: ちょっとホントに出来ないっていう話をして

タモリ: うん

小栗: あの断ったんですけど (TV2)

本文中で述べているのは、異なる先行要素を持つ二つ以上の裸のハが一文に現れることはないということである。

## 4. 分析

### 4.1 問題 A

本小節では、2 節で設定した二つの問題のうち、問題 A「ゼロ形式であっても結束性 (cohesion) が維持でき、かつ、その方が規範的であるにもかかわらず、なぜ裸の助詞という手段が選ばれるのか」という問題について議論する。

ここで改めて、裸のハ以外の助詞の現象を確認する。先に出した例を再掲するとともに、二格以外の格助詞の例も追加する。

- (5) 01 M: (そ) やから: あの: う: もし  
 02 六時半<sub>i</sub> やったやんな:  
 03 H: うん  
 → 04 M:  $\phi$ <sub>i</sub>Ni: たどりついてなかったら:  
 (20) 01 F004: 語学を学ぶの?  
 02 F028: そう, そう, そう, そう。  
 03 もう何ていうの。  
 04 ほんと湖と (うん) 林<sub>i</sub>, ていうか森なんだけど。  
 05 (うん) ど, どっちだ。  
 → 06  $\phi$ <sub>Ga</sub>, あるだけで, (うん) もう周りの町とか, からはもう完全に, 何ていうか, 離れてて。 (meidai-data016-5547)  
 (21) 01 M003: あっちのおっきい方のやつ<sub>i</sub>をどけてな,  $\phi$  こっちへ出して, で, ドウダンツツジに。  
 02 F011: どっちへ $\phi$ <sub>i</sub> 出すの?  
 03 M003: 象の置物置いてあるとこや。  
 04 ドウダンに真夏の直射が当たらんようにして。  
 05 シェイドにすんねん, あれ<sub>i</sub>を。  
 → 06  $\phi$ <sub>O</sub> 1つと, で, ムクゲをどけることによって, ゴールドクレストに食い込んで向こう側に 1 個も枝が出なかったんや。 (meidai-data090-239)

裸の格助詞が現れている (5), (20), (21) を見ると、その現れ方に共通点があることがわかる。裸の格助詞によって導入されるゼロ代名詞の先行要素 ((5) では「六時半」, (20) では「林」, そして (21) では「あっちのおっきい方のやつ」) が、二つ以上の「文」にまたがっている、すなわち「両属連鎖」(岩崎・大野 1999) が見られるという点である。

(20) では、F028 において、裸のガの先行詞である「林」が導入されるのだが、「ていうか森なんだけど。(うん) ど, どっちだ。」のように、「林か森か」に関するやりとりが挿入されたのちに、「が, あるだけで」の裸のガによって、その「林」を先行詞とするゼロ代名詞が存在動詞「あ

<sup>7</sup> 名大会話コーパス。音声の確認は取れていないが、裸の助詞であることが前後の文脈で確実な例をとった。data016 の 554 行目の意。以後同様。

る」の主格名詞として再導入されている。

ここで注目すべきなのは、最初に導入された名詞句「林」と裸のガと共に導入されている（「林」を先行詞とする）ゼロ代名詞はそれぞれの文において異なる文法機能を果たしているという点である。前者は述語の役割を果たし、後者は、裸のガがあることにより、述語「ある」の主体の役割を果たしていることが明示的である。このような裸のガを削除することはできない。裸のガでなければ、「(湖と) 林があるだけで…」とガ格名詞句を顕在化させ、「林」を繰り返すという余剰的な表現手段をとるしかない。この場合、裸のガは、結束性が維持でき、かつ、余剰性を排除した最も経済的な表現手段だと言える。(5) の例も同様で、(20) と異なるのは、話者交替の有無であるが、裸の格助詞の使用には話者交替の有無は直接関係ないことがわかる。

一方、(21) の裸のヲの例では、述語「どける」のヲ格名詞句（「あっちのおっかい方のやつを」）として導入され、話者交替があつて、「あれを」のように指示詞と共に「シェイドにする」という述語の目的語として導入されたのちに、「どける」の目的語として裸のヲと共に再導入されている。興味深いのは、(20) とは異なり、(21) では名詞句、指示詞「あれ」、そしてゼロ形式が一貫して述語の目的語であるという点である。(21) において「出す」の目的語は、話者交替があつても格助詞句全体がゼロ形式になっている。ゼロ形式によって結束性は保たれている。しかしながら、「どける、出す」のが「シェイドにする」ためだという理由が挿入されて（林 2005 で言うところの「サイド・アクティビティー」）、再び本題（林 2005 で言うところの「メイン・アクティビティー」）に戻る際に、裸のヲが現れているのである。

先の(20) の例についても、「ていうか森なんだけど。」の部分挿入部、すなわち、サイド・アクティビティーとして捉えれば、メイン・アクティビティーに戻る際に裸の格助詞が出現すると言い換えることができる。

作例ではあるが、下記のように、述語が異なり、また、文法機能が異なっても、話題が展開している過程では、発話交替の有無にかかわらず、ゼロ形式によって結束性は維持されるようである。

(22) 昨日、花子<sub>i</sub>に会って、 $\phi$ 聞いたんだけど。最近 $\phi$ 結婚したんだって。

(23) A: 昨日花子<sub>i</sub>に会って、 $\phi$ おもしろいこと聞いたよ。

B: ふーん。なんか、最近 $\phi$ 結婚したらしいね。

(22)、(23) 共に、一番目のゼロ形式には二格名詞句（「花子に」）が補われるが、二番目のゼロ形式に補われるのは、「花子が」すなわちガ格名詞句であり、文法的機能は異なっているが、ゼロ形式のままでも結束性が保たれている。

しかしながら、次のように、いったん展開した話題を元に戻した際には、ゼロ形式ではなく、「その子」のように名詞句を顕在化させなければならない。このようなとき、「その子が」の代わりに、より経済的な表現手段である裸の助詞が現れうると考えられる。

(22)' 昨日、花子に会ってね。あ、知らないか。同じクラスの子なの。その子が急に結婚してね、びっくりした。  
 $\phi$ ガ

(23)' A: 昨日花子に会ってね。

B: 誰? 知らんなあ。

A: あ, そっか。同じクラスの子なの。その子が急に結婚してね, びっくりした。

φガ

係助詞や副助詞が裸で現れる場合はどうか。

副助詞が裸で現れる環境は、裸の格助詞の場合とは違って、本題（あるいはメイン・アクティビティー）に復帰することを示しているとは言えないことは、下記の (24), (25) の例からも明らかである。(24) の裸のモは削除されるとモがあることによって伝えられる累加の意味がなくなるし、(25) にいたっては裸のダケのみによる発話なので、削除することはできない。(24) の裸のモには直前の「長いの」を先行詞とする「それ」という代用表現とともに「それも」と表すべきところが、より経済的な手段として（規範的ではないが）裸のモが選ばれている。(25) の裸のダケも、直前の発話の「秋」をうけ、「それだけ」と表現される場所である。いずれも、格助詞の場合と同様、それぞれの助詞本来の文法的機能は保持した上で、裸の形で現れているのである。

(24) 01 F001: キムタクみたいな感じ。

02 (は一) 何か, ふわふわとした。

03 F093: パーマかけてちゃ, じゃあだめじゃん。

04 F001: もう, うん。

05 F093: 長いのはだめ?

→ 06 F001: Mo, だめ。

07 F093: あー, そっかそっか。

08 F057: そりゃ, はげてる方がいいんだって。

09 F001: うん。

(meidai-data086-1715)

(25) 01 F128: 〈笑い〉いつだろう?

02 M023: 夏は俺, 向こうだって。

03 まるっきり向こう行っとったもん。

04 F128: 紅葉?

05 香嵐溪が混むのって,

06 M023: 秋。

→ 07 F128: だけ?

08 M023: ほかに何が。

09 香嵐溪へびセンターなんてあってないようなもの, ってないよな。

(meidai-data005-1159)

係助詞の「は」の単独用法, すなわち裸のハの場合も, メイン・アクティビティーへの復帰の手続きとはみなせないものの, (26) のように, 裸の副助詞と同様, 直前の発話で導入された言

語表現（「指導書，教え方の手引き」）を先行詞とする代用表現「それ」と共に現れるべきところに出現しているとみなされる例がある。

- (26) 01 F152: 全然気がつかなかったねえ。  
 02 F030: ねえ。全然気づかなかった。  
 03 ああ，そうそう。  
 04 だからあれだな，その，みんなの日本語，そういうのは1つは渡したいよね。  
 05 F152: うん。持つんならあれじゃん，やっぱり。  
 06 F030: とあたしもそう思うよ。  
 07 だよねえ。  
 08 F152: そうなの。  
 09 でも，高いよねえ，4冊買えっていうのは，1万円近く行かない？  
 10 F030: 行くんじゃない？  
 11 F152: 行くよねえ。  
 12 F030: うん，あの一，指導書，教え方の手引き。  
 → 13 F152: Wa, 抜いて。  
 14 F030: 抜いて？  
 15 F152: 本冊と文法解説書。  
 16 F030: 文法解説書として。  
 17 あれ，ばらばらだもんね。 (meidai-data106-533)

ここまで裸の格助詞と副助詞，そして裸のハが出現する環境について考察してきた結果に基づき，問題A「ゼロ形式であっても結束性（cohesion）が維持でき，かつ，その方が規範的であるにもかかわらず，なぜ裸の助詞という手段が選ばれるのか」について検討する。

日本語ではゼロ形式で結束性が維持できるのは確かであるが，上で取り上げた裸の助詞の例は，いずれも，助詞を削除して完全にゼロ形式にした場合には，結束性が保たれないか，または，その助詞によって付与されるべき意味が欠如するというものである。したがって，規範的な表現形式をとるとすれば，ゼロ形式ではなく，代用表現を伴う助詞句として表されるべき環境である。

裸の格助詞については，林（2005）で述べられているように，格助詞本来の文法的機能を果たすだけでなく，当該発話によりサイド・アクティビティーからメイン・アクティビティーに復帰することを示す手続きとしての談話構成上の働きもしている。

裸のハはどうか。(26)のように，格助詞や副助詞と同様，削除すると結束性が保たれないものも確かにあるが，次の例のように，削除しても結束性が保たれる場合の方が多い。

- (27) 01 F112: え，おかまなの，ニューハーフじゃないの？  
 02 F134: え。  
 03 ニューハーフとおかまって違うの？

- 04 F112: それこそ録音。  
 05 <笑い> (<笑い>) まあちょっとはおかまの方が、男の人かな。  
 06 F134: あ、そうなの。  
 07 F112: っぼい。  
 08 F134: ぼいんだ。  
 09 F112: うん。  
 10 F134: え、ど。  
 11 え、ニューハーフは何？  
 → 12 F112: Wa, まあいろいろと。  
 13 <笑い>  
 14 F134: まあいろいろと？っていうか、なんでそんな、10代でそんな話を知っているの。  
 (meidai-data125-198)

先の(26)の裸のハは削除すると、結束性が保たれないが、(27)は削除しても保たれる。(24)の裸のモの場合でも、削除しても発話自体は成り立つが、モ自体の意味、つまり、累加という意味が表せない。それに対し、(27)の裸のハの果たしている機能は必ずしも明らかではない。(27)では裸のハが疑問文(「ニューハーフは何?」)の応答の冒頭に現れており、裸のハが疑問文の応答に偏って分布することは先行研究で指摘のあるところである。

次節ではこの点について議論する。

## 4.2 問題 B

本小節では、2節で取り上げた問題 B「裸のハがなぜ疑問文の応答の冒頭に偏在するのか、その位置でどのような働きをしているのか」という点について議論する。

### 4.2.1 疑問文・非疑問文、焦点提示・主題解説

裸のハが現れる環境は、先行する発話が疑問文か非疑問文かという点と、裸のハの後続要素がどのような機能を果たしているかという点から、次の五つに分けることができる。

まず、前小節で取り上げた(26)のように、直前の対話相手による非疑問文の発話で導入された要素(下線部)を先行詞とするゼロ形式と共に発話冒頭に現れる場合である。(①)

- (26)' 12 F030: うん、あの一、指導書、教え方の手引き。  
 → 13 F152: φWa, 抜いて。

次に、環境としては①に近いが、裸のハの後続部分が、先行する相手の発言によって表される現状(例(19)では、久保田利伸から花が届いているということ)に対して説明を加える機能を果たしている場合があげられる。(②)

- (19) 01 タモリ: おっ岸谷くんから来てますよ。

02 塚本： ああー嬉しいですねー。

03 タモリ： 久保田利伸くんとかですねー。

→ 04 塚本： Wa: 何か主題歌をあ 드라마でやってもらってますね。

さらに、直前の相手の発話ではなく、その前の自分が談話に導入した言語表現（下線で表示）を先行詞とするゼロ形式と共に発話冒頭に現れる場合もある。(③)

(28) 01 M023: 会話って、何を会話するや。

02 F128: いや、別に。

03 ていうか早く決めよう。

04 あんね、まず、あの、11月4日の話。

05 M023: あ、そっちが先なんか。

06 F128: ちゃう、ちゃうちゃうちゃう。

→ Wa, もう決まって、決まってていうか、ほぼ決まって、(うん) えっとねえ、

07 うんと 11月4日の話はえーと 1時半にあそこの駐車場。

08 M023: 昼の1時半か。

09 F128: うん。

10 朝、よな、夜中から集まっても別に。 (meidai-data005-021)

直前の発話が疑問文で、その応答の冒頭に現れ、疑問の焦点を提示する場合 (④) がある。このような例が、①～③よりも多いことが先行研究でも指摘されている。

(29) タモリ： そ、外に出てやる趣味っていうのはないの。

速水： Wa: まあ、釣りですかね。 (TV2)

④と環境は近いが、疑問の焦点が説明と共に提示される場合がある。(⑤)

(30)<sup>8</sup> A: え - 専攻は何なんですかここ。

(1.0)

R: え - まだ一年生なんで :::,

A: うん。

R: わかんないんですけど一応生化学を、

A: [生化学ね :::

R: [取ろうかな :: は :: い。

A: は - で - (.) あの ::: ○○選んだのは :

→ R: Wa:: 生化学がすごい (.) 有名だってことを :::,

<sup>8</sup> 例文中の表記は下谷 (2010) のまま掲載している。「え -」で発話が途中で切れている、(1.0) で沈黙が1秒間あったこと、「:::」で引き延ばされた発話、(.)でマイクロポーズ、[で重複する発話の始まり、そして「°あ°」で周囲の発話より小さく発話されていることが示されている。

- [ま :: 父親から聞いたんで ::,  
 A: [あ :: そうなの?  
 R: ま :: 是非 [° って感じで°  
 A: [n- あ - ごめんなさいね - あ - あのじゃ -
- (下谷 2010: 109)

4.1 節でも指摘したように、疑問文の応答の冒頭に出現する④、⑤の裸のハは削除しても結束性は維持される。

非疑問文に後続する場合 (①～③)、裸のハは主題解説型の構文を構成していると言える。疑問文の応答の冒頭に現れる場合についても、④のように、コピュラ (「です」) によって疑問の焦点を提示する構文の形をとるだけでなく、⑤のように、背景を解説する、主題解説の形をとる場合もある。焦点提示と主題解説は、日本語の主題文が談話において果たす構文的機能であることから、先行する発話が疑問文であるかどうかにかかわらず、裸のハ構文も通常の主題文と同様の機能を談話において果たしていることが確認できる。

#### 4.2.2 疑問文の意味とハの集合照応性

ここで、裸のハの出現に密接に関係する疑問文の意味についての本稿の立場を示しておく。本稿は、疑問文の意味をその疑問の「可能な答えとなる命題の集合」(Hamblin 1958, 1973, Karttunen 1977) と仮定する<sup>9</sup>。それはたとえば、次の (31), (32), (33) のような疑問文の意味をそれぞれ、(31)', (32)', (33)' のように捉えることを意味する<sup>10</sup>。

- (31) Is John a student?  
 (31)' {that John is a student, that John is not a student}  
 (32) Is John a student or a professor?  
 (32)' {that John is a student, that John is a professor}  
 (33) Which subway line goes to the airport?  
 (33)' {that the red line goes to the airport, that the blue line goes to the airport, that the green line goes to the airport, that the orange line goes to the airport}

疑問文の機能は (34) のように捉えることにする。

- (34) 疑問文が発される際、発話者は当該疑問文が意味するどの命題が真であることを述べるよう  
 に対話者に要請する。

また、「Xハ」の意味を Miyagawa (1987) の集合照応性 (set-anaphoricity) に求めた有田 (1999: 142) に従い、Xハ構文の意味を以下のように仮定する。

<sup>9</sup> 疑問文の意味については、最近の Inquisitive Semantics の枠組み (Groenendijk & Roelofsen 2009 など) で研究が進んでいるが、本稿では、伝統的な疑問文の扱いを採用することとする。

<sup>10</sup> Heim (2000) における疑問文の意味の入門的な説明を借用している。

(35) XハY構文の意味 (有田 1999: 142)

- a Xに述語としてYが与えられる。
- b ハがマークされたXは談話において定義的属性が明らかな対象を表す。

(35) は、Miyagawa (1987) でも議論されているように、次のような現象に対し説明力を持つ。

(36) A: 昨日田中に会ってさあ。

B: 田中 {って/\*は} 誰だい?

(37) a \*誰は来たの。

b (このメンバーの中で) 誰は来て、誰は来なかったの。

(36B) に「は」が現れないのは、「田中」がBにとって、「定義的属性が明らかな対象」((35b))ではないからである。(37a)が不適格で(37b)が適格なのは、(37a)の「誰」が定義的属性が明らかでないのに対し、(37b)では「このメンバー」という限定された範囲の中で、「来たかどうか」によって対象が定義できるからである。

(34), (35) より、疑問文の応答に現れるXハY構文は以下のように捉えることができる。まず、(34)より、(38A)の疑問文は、「こしあんが売り切れである」「こしあんが売り切れではない」という二つの可能な答えとなる命題の集合を意味し、これを発することにより、どの命題が真であるかが述べられるよう要請する。同様に(39A)は、外でやる趣味が何かに対する可能な答えとなる命題の集合を意味し、それを発することにより、どの命題が真であるかが述べられるよう要請するのである。

(38) A: こしあんは売り切れ?

{こしあんが売り切れであるコト, こしあんが売り切れではないコト}

(39) A: 外でやる趣味は?

{外でやる趣味が山登りであるコト, 外でやる趣味がガーデニングであるコト, 外でやる趣味が釣りであるコト, ...}

応答にハ句が出現しやすいのは、先行の疑問文の意味する可能な答えの集合に照応するからで、XハY構文は、その集合の要素から真の答えをYとして提示する。規範的には、「それは」のように指示詞を伴って出現するところだが、より経済的な表現手段として、裸のハがとられるのである<sup>11</sup>。

裸のハが裸の格助詞と分布環境が異なるのは、ハ句が文の前提部を構成するのに対し、格助詞句が焦点部を構成するという、それぞれが本来持つ談話文法機能の違いに帰することができる。

<sup>11</sup> Den & Nakagawa (2013) は、Anti-zero pronominalization としての主題のハ句を分析しており、発話内容が複雑な場合、主題はゼロではなく顕在化すること、フィラーのような発話冒頭の要素はゼロ主題の時よりも主題が顕在化した時のほうが出現しにくいこと、発話内容がより複雑になると、主題句の最後のモーラ（つまり「は」）が長引く傾向があることを指摘し、疑問文の応答部においてハ句全体でフィラーのような発話調整の働きをしていると主張している。本稿の裸のハが発話冒頭で果たす機能は、発話冒頭に出現する主題句、つまり顕在化した主題句においても果たされていると言える。

裸の副助詞も疑問文の応答の冒頭に出現することがあるが、それは、副助詞が本来「他の項との相対的關係のありかた」(森重 1965: 60)を表すもので、疑問文の応答という環境は、先行する疑問文が意味する可能な答えとなる命題の集合を意味しているので、そのうちの一つをあげて、他の要素との關係のあり方を述べるという副助詞本来の文法機能が發揮されやすいからだと言える。なお、裸のハとは違って裸の副助詞が削除されにくいのは、裸のハのように集合に照応するだけでなく、その集合の一項と別の項との關係を表すという機能を担っているからに他ならない。

このように、裸のハが疑問文の応答の冒頭に現れやすいのは、疑問文の意味とハの集合照応性から説明できるのである。

疑問文の応答の冒頭に出現する裸のハは削除しても結束性は維持される。なくても成立するのに、なぜ裸のハが出現するのか。

#### 4.2.3 裸のハと配慮

実際の会話では必ずしも疑問文の形をとって情報提供を相手に促すわけではない。疑問文は相手に何らかの情報提供を要求する (inquisitive) 典型的な文形式に過ぎない。

裸のハは、疑問文に限らず、inquisitive な文の応答の冒頭に現れ、対話相手の発話の「知りたいこと」を充足する可能な答えの集合に照応しているとみなすべきであろう。先の (30) の裸のハの直前の「○○選んだのは:」というのも、疑問文の形をとらずに情報提供を相手に促しており、対話相手がそれを察知して裸のハで応答している。次のような例もそうである。

(40) 客: 少し厚手のシャツを探してるんですが。

店員: Wa: こちらなどはいかがでしょう。(洋服店にて)

(41) A: な一納得とかってのは一、

B: Wa: してないですね。

(Hudson 2014, (6))

対話相手の顕在化していない情報要求を先取りして答えを与えているという点で、一種の配慮形式とも言える。なくても結束性が維持されるにもかかわらず冒頭に単独で現れるのには、配慮形式としての働きが関わるのではないか。この点も含め、節を改めて論じる。

## 5. 提題形式から感動詞へ

### 5.1 裸のハの二面性

有田 (2009, 2011, 2012) では、裸のハが優先的応答 (preferred response, Pomerantz 1984) に現れる場合と非優先的応答 (dispreferred response, Pomerantz 1984) に現れる場合とを区別した上で、後者に現れる場合には非優先的応答に付随する対話相手に対する「そっけなさ」を回避する効果があり、前者に現れる場合には「積極的に肯定することへの躊躇」を表す効果があるとし、「対話相手に対する最小限の配慮形式」という見解を示した。

非優先的応答の前に裸のハが現れやすいのは、非優先的な応答をする場合のほうが、優先的な応答をする場合よりも、より相手に配慮する必要があるからである。

以上の点を確認するために、日本語母語話者 42 名に対して簡単なアンケート調査を行った。このなかで、裸のハを使用しない、あるいはめったに使用しないものが 29 名、聞くことがない、あるいはめったに聞くことがないものが 20 名だった。

裸のハを日頃使用するという自覚のある日本語母語話者 13 名のいずれもが、裸のハを言う場合 (42/43B) と言わない場合 (42/43B') に何らかの違いを認めている。

(42) A: お酒売り場はどこですか？

B: はー、2階です。

B': 2階です。

(43) A: 今度の旅行どうする？

B: はー、まだ決めてない。

B': まだ決めてない。

裸のハあり	「返事考えている」「確定していない」「あいまい」「考えあぐねている」「間を持たせたい」「柔らかくて優しい感じ」「ちゃんと話を聞いている」
裸のハなし	「あっさりして、冷たい感じ」「そっけない感じ」「確信がある」「事務的」

また、裸のハを日常的に聞くことがあるとする日本語母語話者 22 名によると、(44) の店員 A と B の対応に対して 16 人、(45) の B と C の答え方に対しても 11 人が違いを感じている。

(44) 客: あんパンは売り切れ？

店員 A: はー、売り切れましたね。

店員 B: 売り切れましたね。

(44) の店員 A と店員 B の答え方について以下のように答えている。(複数回答あり)

裸のハなし	Bの方がそっけない (11名)
裸のハあり	Aの方が丁寧 (3名) Aの方が気さくで事務的じゃない (1名) Aの方がなれなれしく感じる (1名) Aの方がタメ口で店員として適切ではない (1名)

A と B を比較して、裸のハのない B の応答に対し、16 名中 11 名が「そっけない」と感じているのだが、裸のハがある A の応答に対しては、「丁寧」という意見がある一方で、「なれなれしい」「気さく」「タメ口」と、正反対の意見が見られる。

(45) A: 得意な科目は何でしたか。

B: はー、国語ですかねー。

C: 国語ですかねー。

(45) の B と C の答え方に対しては、以下のような回答が見られた。

裸のハなし	Cの方がそっけない (1名)
裸のハあり	Bの方が遠慮がち (8名) Bの方が「強いて言うなら」というニュアンス (1名) Bの方が気さくで事務的じゃない (1名)

ここでも、裸のハがあるBの応答に対して、「遠慮がち」という意見がある一方で、「気さく」という正反対な意見が見られる。

さらに、裸のハを伴う表現に対する印象について書かれた自由記述欄にも、「配慮がある」「質問内容をしっかり考えているような感じ」という好意的な記述がある一方で、「言葉を略して丁寧さを欠く」「タメ口や若者言葉のような感じがする」「そっけない感じがする」という否定的な記述もあった。

調査項目の面でも、また、回収数の面でも、決して十分とは言えないものの、日常的に使用する母語話者にとって裸のハの使用には、応答の内容に対して確信がない、躊躇があるという話し手の心理状態が反映されていると捉えられる面があり、これは、「言いよどみ系」の感動詞類(田窪 1995)を使用する際の心理状態と共通するものでもある。なくても結束性が保持される環境に出現する裸のハは、しばしば長く伸ばして発音されるという特徴もあり、「文節末の母音の長音化、「え」「ええ」「ま」「あの」「ええと」「なんか」「も、もう」など」(田窪 1995)のような言いよどみ系の感動詞の働きを担いつつあると言える。

その一方で、アンケート結果には「ちゃんと話を聞いている」という意見もあることが注目される。これは、「入出力制御系」の感動詞類(田窪 1995)の特徴でもある。入出力制御系感動詞の典型的なものは、「はい」「いいえ」のような応答詞で、対話相手が言った内容をどう処理したかを示すものである。「ちゃんと話を聞いている」も、その処理の一つと捉えることができる。つまり、裸のハには言いよどみ系、入出力制御系の両面が備わっていると言える。

さらに、この入出力制御系感動詞としての働きにも関係すると思われるが、日常的にこの表現を聞く母語話者にとって、裸のハの存在は、そっけなさを回避することにより相手に配慮するという面があると認められる一方で、配慮形式としては十分でないという意識もあり、ここに、配慮を表す形式としての二面性があることがわかる。これをどのように考えたらよいか。

主題解説構文「XハY」においてYには何らかの解説が述べられる。「んー」や「まあ」「えーと」のようないわゆる「フィラー」(山根 2002)の場合は、そのあとに何が続くかは予測できないが、主題解説構文を基盤とする裸のハ構文では、その後部要素には何らかの解説、あるいは情報として意味のある何かが続くことが聞き手にとっては予測され、話し手は聞き手に対してそれを予告することになる。それが時に聞き手に対する配慮となるのではないかと考える(有田 2013)。

一方、その配慮は最小限である。配慮を言葉で表現するには、言葉を尽くさなければならないのに、相手の発話に最大限に依存した「は」で済ますのは、配慮の欠けた表現とも言える<sup>12</sup>。

<sup>12</sup> 宮本(2013)では、裸のハが「あー」や「えー」といったフィラーよりも、誠実な印象を与えるとする一方で、省略した部分について連想・推論することを、半ば強制的に相手に促しており、ある意味、相手への配慮を欠いた発言とも指摘されている。

## 5.2 裸のハのこれから

裸のハを使用する人は限られている。そして、その使用者は単純に性別、年齢、地域等で特徴づけられるものではない。しかも、使用する人の間でも、使用頻度には個人によって大きな開きがある。本小節では、裸のハを頻用する話者の使用例を分析し<sup>13</sup>、裸のハの使用がどのように拡大していくのかを考察する。

対象とするのは、柔道家松本薫で、彼女がロンドンオリンピックで金メダルを獲り、日本に戻ってきてから、NHKの朝のニュースのスタジオで受けたインタビュー（生放送）の内容を題材にする。松本薫は、このわずか9分間のインタビューの間の34回の質問のうち14回を裸のハで応答している。

対象としている松本の裸のハの多くは、インタビュー形式ということもあり、基本的には、次に見るように4.2.1の④、⑤に該当する。

(46) 佐々木：ふだん、柔道を離れて、ふだんは、（松本：Wa:）どういう性格だと自分で思われてますか。

→ 松本： Wa: えー、無気力（笑）

(47) 佐々木：じゃあ、手作りのものをこうして、チャーハンだけでなくいろいろなものを作ってくださいってるんですね。

松本： はい。

佐々木：たとえば、ねえ、どんなものを

杉浦： チャーハン以外だとどんなものが

→ 松本： Wa: カレーとか、あと、貧血になりやすいんで、レバ、レバニラ炒め、とか（阿部：おお）はい。

で私はレバきらいなので、絶対自分で買うことはないんで、それでいつも父が。

(TV3)

以上の例では、裸のハが直前の対話相手の発話における疑問文の可能な答えに照応し、その答え（「無気力」「カレー、レバニラ炒めとか」）を与えていると捉えることができる。

一方、以下の例は、対話相手の疑問文（「いつ頃からなんでしょうか」「どういうことですか」）の可能な答えの集合から答えを提示しているとは言えない。

(48) 阿部： そういう闘争心を出すようなタイプになったというのはいつ頃からなんでしょうか。

→ 松本： Wa: 小学生のときに、あの、私は兄弟が多いのでいつも両親はあまり試合に見に来てくれないのですが、そのときはたまたま両親が見に来て、その試合のときに、虫みたいな柔道だね、って言われて、

<sup>13</sup> 宮本（2013）では、プロ野球選手大谷翔平がプロ野球のドラフト会議で日本ハムからの強行指名を受けた直後の会見を取り上げているが、大谷も松本薫同様、裸のハを頻用する傾向があり、宮本は「相手の発話を引き受けたことを強く提示し得るフィルター」と分析している。

佐々木：虫みたい。

松本： はい

佐々木： どういうこと

杉浦： これ、虫みたいってどういうことですか。

- 松本： Wa: あたし、もともと攻撃的ではなくて、逃げるタイプ、だったんで、はい、畳の上を虫のようにはいずりまわっているって、(阿部：そういう) はい、言われました。(TV3)

裸のハで始まる発話は、必ずしも、疑問文の可能な答えの集合から適切な答えを提示しているとは言えず、対話相手の疑問に答えるという姿勢を示すに留まっている。

次は「柔道チャンネル」というウェブサイト上に公開されているメッセージで、疑問に答えるという姿勢すら見いだすことはできない。このメッセージの冒頭の裸のハは、これから(意味のある)まとまった話をするという予告<sup>14</sup>とでも言うべきだろうか。

- (49) 松本： Wa:ほんとに今回金メダルがとれたのは、ほんとに皆様の応援のおかげだと、私自身実感を今回で、はい、実感しました。で、また、今回で終わらず、また、あの一、二連覇を、を一して、目指してがんばっていきたくいで、また力を貸して下さい。よろしくお願いします。(柔道チャンネル)

このように、裸のハを頻用する話者の使用には、対話相手からの疑問に対する答えを提示するというXハY構文に由来するような用法に留まらず、相手の疑問に答えるという姿勢を示す((48))、さらには相手にある程度まとまった話をするを予告する((49))、というような、係助詞のハの本来の文法的機能がかなり希薄化したものが見られる。

## 6. まとめ

裸のハは、拘束形態素の自由形態素化という日本語文法に広く見られる現象の一つである一方で、疑問文の応答の冒頭に偏在し、感動詞への変化の途上にあることが認められることを議論してきた。

裸のハは、他の裸の助詞類と同様、両属連鎖あるいは発話順番をまたがる文という話し言葉特有の現象の一つとして捉えられ、裸の助詞が存在することによって結束性が保たれるような環境に現れるという面がある。つまり、先行する発話の一部または全部を先行詞とする一種の代用表現の役割を果たしている。規範的にはソ系の指示表現と共に現れるところだが、指示詞は、英語

<sup>14</sup> 下谷(2010)においても、このような裸のハの使用の指摘があり、「シフトされた話題を取り立てると同時に、その後の発話(特に、一言では説明しづらい内容)をどのように提示していくかという発話計画の組み立てを合図(signal)していると言える。そして、そのシグナルは、その後続く発話(つまり、質問の答えとなる発話)が及ぶであろう範囲を投射する働きをしているとも思われる。そのため、会話の中では、談話標識(discourse marker)的な役割を担っていると考えられる」(下谷 2010: 112-113)と述べられている。本稿の(48)はそのように捉えることができるが、(49)は質問の答えですらなく、これからまとまった内容を話すことの合図とでも言うべきである。

等の *it* や *that* のような代名詞とは異なり、希薄ながらも語彙的意味を持っており、それゆえ、指示対象によって語形も変える必要があり、直前の発話の要素を指し示すには、情報量が過剰であるので、規範的ではないものの、より経済的な表現手段として裸の助詞が選ばれていると考えられる。裸のハを含め、このような環境に現れる裸の助詞類は、助詞として、それが現れる文において本来の文法的機能を果たしている。

裸のハは、一方で、その集合照応性という内在的な意味により、可能な答えとなる命題の集合を意味する疑問文に呼応する形で発話の冒頭に出現し、その集合に照応するという面がある。ここに出現する裸のハは、削除しても結束性が保たれる。それにもかかわらず、出現するのには結束性保持以外の理由があると考えらるべきである。

後者の環境に現れる裸のハは、なくても結束性は保持されるが、ある場合とない場合を比較した場合に、産出の面においても理解の面においても違いを感じる母語話者がいるのは確かである。裸のハを使用する話者は、応答の内容に対して確信がない、躊躇があるという話し手の心理状態が反映されていると捉えている。これは、「言いよどみ系」の感動詞類を使用する際の心理状態と共通するものである。

裸のハを伴う応答に対し、「相手の話をよく聞いている」「そっけない感じではない」という印象を持つ母語話者がいることも注目される。これは、「入出力制御系」の感動詞類の特徴でもある。疑問文の応答の冒頭に出現し、結束性保持に不可欠とは言えないような裸のハは、係助詞から感動詞への変化の途上にあると捉えることができるのである。

裸のハの使用には個人差がある。頻繁に使用する話者の使用例には、完全に感動詞に移行し、談話管理標識 (Discourse Management Markers, Fraser 2009) とでもいうべき働きをするものも見られるが、そこで果たしている役割は、係助詞としての文法・談話機能と連続的に捉えられるものである。

## 参考文献

- 有田節子 (1999) 「テハ構文の二つの解釈について」『国語学』199: 41-56. 国語学会。  
 有田節子 (2005) 「対話における「文頭の『は (wa)』」の機能について」『日本語用論学会第8回大会発表論文集』, 1-8.  
 有田節子 (2009) 「『裸のハ』についての覚え書き」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』16: 95-106.  
 有田節子 (2011) 「省略と残存—発話冒頭に出現する提題助詞「は」の分布と機能—」Paper presented at Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7), サンフランシスコ州立大学。  
 有田節子 (2012) 「発話冒頭に現れる「は」の分布と機能について」(第65回言語・音声理解と対話処理研究会, 京都大学, 2012年7月30日). 人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B201: 19-24.  
 有田節子 (2013) 「裸のハ: 提題助詞から心的操作標識としての感動詞へ」(助詞「は」の使用に関するミニワークショップ, 国立国語研究所, 2013年12月6日).  
 Den, Yasuharu and Natsuko Nakagawa (2013) Anti-zero pronominalization: When Japanese speakers overtly express omissible topic phrases. *Proceedings of Disfluency in Spontaneous Speech*, DiSS 2013: 25-28.  
 Fraser, Bruce (2009) Topic orientation markers. *Journal of Pragmatics* 41(5): 892-898.  
 Groenendijk, Jeroen & Floris Roelofsen (2009) Inquisitive semantics and pragmatics. In: Jesús M. Larrazabal & Larratiz Zubeldia (eds.) *Meaning, content and argument: Proceedings of the ILLI International Workshop on Semantics, Pragmatics and Rhetoric (SPR-09)*, 41-72. San Sebastián: Universidad del País Vasco, Servicio Editorial.  
 Hamblin, Charles Leonard (1958) Questions. *Australasian Journal of Philosophy* 36: 159-168.

- Hamblin, Charles Leonard (1973) Questions in Montague English. *Foundations of Language* 10: 41-53.
- 服部四郎 (1949) 「具体的言語単位と抽象的言語単位」『コトバ』2: 16-27. (服部四郎 1960 『言語学の方法』岩波書店に再録)
- 林誠 (2005) 「『文』内におけるインターアクション—日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって—」串田和也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』1-26. 東京: ひつじ書房.
- Heim, Irene (2000) Notes on interrogative semantics. Tuebingen 大学講義ノート FOR 24.973 “ADVANCED SEMANTICS” SPRING 2000  
(<http://www.sfs.uni-tuebingen.de/~astechow/Lehre/Wien/WienSS06/Heim/interrogatives.pdf>)
- Hudson, Mutsuko Endo (2014) Utterance-initial bare wa in Japanese. *JSL 2014 Conference Handbook*.
- 岩崎勝一・大野剛 (1999) 「『文』再考—会話における『文』の特徴と日本語教育への提案」アラム佐々木幸子 (編) 『言語学と日本語教育—実用的言語理論の構築を目指して』129-144. 東京: くろしお出版.
- Karttunen, Lauri (1977) Syntax and semantics of questions. *Linguistics and Philosophy* 1: 3-44.
- Miyagawa, Shigeru (1987) *Wa* and the WH phrase. In: John Hinds, Senko K. Maynard and Shoichi Iwasaki (eds.) *Perspectives on topicalization: The case of Japanese wa*, 185-217. Amsterdam: John Benjamin Press.
- 宮本淳子 (2013) 「発話頭に現れる「は〜」(発音わ〜)の機能」『社会言語科学会第32回大会発表論文集』22-25.
- 森重敏 (1965) 『日本文法—主語と述語』東京: 武蔵野書院.
- 那須紀夫 (2011) 「文の外縁部を構成する要素について」『KLS』36: 310-321.
- 西阪仰 (2008) 「発言順番内において分散する文—相互行為の焦点としての反応機会場」『社会言語科学』10(2): 83-95.
- Pomerantz, Anita (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn-shapes. In: John Maxwell Atkinson and John Heritage (eds.) *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, 79-112. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sato, Yosuke (2012) Particle-stranding ellipsis in Japanese, phase theory, and the privilege of the root. *Linguistic Inquiry* 43(3): 495-504.
- 下谷麻記 (2010) 「発話頭に現れる助詞「は」の使用とその相互行為上の役割—自然会話における文構造の一考察—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』20: 97-118.
- 田窪行則 (1995) 「音声言語の言語学的モデルをめざして—音声対話管理標識を中心に—」『情報処理』36(11): 1020-1026. 情報処理学会.
- Watanabe, Kazuha (2008) Current change in Japanese pronoun—A development of new pronoun? Paper presented at the 18th International Conference of Historical Linguistics.
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるファイラー』東京: くろしお出版.
- 吉田智行 (2004) 「主題の省略現象—比較統語論的考察」論集編集委員会 (編) 『日本語教育学の視点』291-305. 東京: 東京堂出版.

## 用例出典

- TV1: キスだけじゃいや (日本テレビ系, 2004年11月29日), TV2: 笑っていいとも (フジテレビ, 2003年11月18日・12月8日・12月9日), TV3: おはよう日本 (NHK, 2012年8月14日) (いずれも文字化は筆者)
- 柔道チャンネル: ホームメイト柔道チャンネル ([http://www.judo-ch.jp/interview/matsumoto\\_k/](http://www.judo-ch.jp/interview/matsumoto_k/)) 2015年3月11日閲覧
- meidai: 名大会話コーパス

## On the Utterance-initial *wa* of Responses to Interrogatives: The Transition from Topic Marker to Discourse Marker

ARITA Setsuko

Ritsumeikan University / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

This paper deals with the phenomenon in which *wa* appears in Japanese conversation without preceding phrases (hereafter referred to as Bare-*wa*). I will show that the phenomenon raises fundamental questions about *wa* as a conventional topic marker, and then I will propose a new analysis of the phenomenon. I argue the specific function of Bare-*wa* in the discourse, which is not seen for case particles, on an assumption that Bare-*wa* is identical to topic marker *wa*, and that the utterance-initial *wa*, especially, acquires an interjectional function because it is inspired by a focus-presenting function indigenous to its topic marking usage.

**Key words:** Bare-*wa*, utterance-initial, particle stranding, interjection, discourse marker